

令和

桜も満開の東京は曇りがちで春爛漫とは言いがたいのですが、花冷えもあり一日でも長く楽しめるのは心弾むものです。

平成最後のお花見時に、次の元号は公表されました。崩御に伴う改元とは違い、お祝いムードに包まれています。象徴天皇制となり、そのあり方を模索し国民との距離をグッと近づけた平成は天皇制の新しい始まりであったように思います。次の元号も禪譲前に決めたり、国書から採用するなど、初めてのことが多くあります。今上天皇(第125代天皇)の姿勢が新しいことを生む土壌を熟成された成果だと感じますし、グローバル化が進む今日に沿った結果だと思います。この変化に乗り遅れぬよう努めなければならないと思うところです。

「万葉集」が出典と伝わると、万葉集関係の本が売れているとのこと。忘れ去られた感のある古典に気を止める人が多く現れることは、書物を扱うものとしては歓迎すべきことでしょう。昨今、古典文学を学ぶ人も少なくなり、文学、歴史、芸術・・・あらゆる分野で過去のことを知り、学び、研究することが敬遠されているようです。自分の今があるのも、“一日にして成らず”で、過去があって今があるのです。改元を契機に、学校で教わったことを振り返るもの良いことでしょう。新たなアイデアが生まれるかもしれません。

振り返ると言えば、“えぽっく”も20年続けているのです。八重洲古書館が東京駅・八重洲地下街で賑わっていた頃スタートしました。21世紀に向かって新たな古書店像を模索し張り切っていた様子が紙面からうかがえますが、今日は読書人口の大幅減少の真っ只中にいます。

平成時代を振り返ると、I Tの発展がめざましく、紙媒体の書籍や雑誌、資料の役割が大きく後退した現実が見えます。電子書籍が普及し、古典籍、古書がデジタル化されています。手元のパソコンで、ページをめくり調べたり読むことができるのです。絶版の書物を探し求めて古書店を巡ることも必要なくなるのです。すべての書物が閲覧できるようになるのが、あと何年先なのか、数十年先なのか、定かではありませんが、

そして、人工知能(AI)の時代。自分たちが学び、記憶し、判断し、活用し、創造することを機械が引き受け、何でも思うように代行してくれる時代が到来するようです。何千倍、何億倍もの記憶力と計算力を持って、より正確により速やかに判断し、行動してくれることでしょう。はて、人間は何を生きがいに生きていくことになるのでしょうか？

今回、AIは「令和」を予想していませんでした。万葉集などの国書を読み込んでいなかったのでしょうか。まだまだ幼子のAIには優秀な人間の教師役が必要なのでしょう。

いずれにせよ、これから新たな激動の時代を知ることになるでしょうが、平成同様、戦争のない時代であって欲しいと切に願います。

当店は、6月に90周年を迎えますが、あくまでも通過点で、100周年が目標です。皆さま方のお力添えを戴きながら歩んでいきたいと思ひます。今後ともよろしく願いいたします。

金井書店　花井敏夫

あるドイツ人作家の著作を巡る古書遍歴

テオドール・プリーヴィエ(Theodor Plievier)というドイツ人作家をご存知でしょうか?おそらくほとんどの方が知らないと思います。私はふとした出会いで彼の作品(訳書)に出会って大変な感銘を受け、それから翻訳されている作品をずっと探し求めているまいりました。この作者についてはとにかく、本好きな方でしたら同じような経験もあるのではないかと思います、今回それにまつわる体験を綴らせていただきます。

テオドール・プリーヴィエは1892年ベルリンに生まれ、世界各地を放浪し様々な職業に就き第一次世界大戦の初めから終わりまで水兵として軍艦に勤務、1918年ヴィルヘルムスハーフェンの水兵協議会の機関誌の編集長となり、以来ドイツ革命運動に参加、ヒトラー政権獲得後に亡命、フランスに1年滞在の後にソ連へ移り、大戦中は独ソ戦をつぶさに観察して、独ソ戦三部作『スターリングラード』(1945)、『モスクワ』(1952)、『ベルリン』(1954)を発表し、戦後ドイツにおける戦争文学の一つとして高く評価され、多くの言語に翻訳されています。彼は1945年ソ連軍と共にベルリン入りし、東ドイツに居住しましたが後に西ドイツへ移住し、1955年にスイスで没しました。

Webcat Plusによれば、彼の邦訳されている作品は以下のとおりです。(タイトル・著作者等・出版元・刊行年月)
『ベルリン』テオドール・プリーヴィエ著 金森誠也・安藤勉共訳 論創社 1992.9
①『モスクワ』テオドール・プリーヴィエ著 金森誠也訳 フジ出版社 1986.2
②『スターリングラード攻防戦』テオドール・プリーフィア著 向後英一訳 角川書店 1976
③『カイゼルは去ったが將軍たちは残った』テオドール・プリーヴィエ著　舟木重信訳 白水社 1953
④『死のスターリングラード』プリーヴィエ著 舟木重信訳 角川書店 1952
『スターリングラード』テオドール・プリーヴィエ著 舟木重信訳 改造社 1951
『スターリングラード』テオドール・プリーヴィエ著 舟木重信訳 改造社 1950
(Webcat Plusは、国立情報学研究所(NII)が提供する、全国の大学図書館1000館や国立国会図書館の所蔵目録、新刊書の書影・目次DB、電子書籍DBなど、本に関する様々な情報源を統合して、それらを本・作品・人物の軸で整理した形で提供するサービス)

ゾッキ本という言葉をご存知でしょうか?古書市場において安い価格で売られる新品本の事です。私とプリーヴィエとの出会いはまさにそこでした。歴史や戦記の翻訳書を得意としたフジ出版社という会社があり、ここから出版された新本が一時期大量に古書市場に出回っていたのです。おそらく1988年頃に倒産したようですが、私が1991年頃におそらく神保町のどこかの古書即売会で偶然手にしたのは『モスクワ』でした。

それは1941年6月に勃発したドイツ軍侵攻「バルバロッサ作戦」において三方向に分かれた大量の軍勢の中央軍は首都モスクワを目指すドイツ軍、襲撃に混乱するソ連軍双方から描かれた作品でした。戦争を扱った小説の多くはどちらか一方からの視点で綴られる作品が多いように思いますが、『モスクワ』は高官、政治家、兵士、市民といった多くの視点からドイツとソビエトの両面から生々しくその様相を描いたものです。それは空想の産物ではなく、大戦中にソ連で過ごしたプリーヴィエが、捕虜となったドイツ軍將兵との会話や、日記や手紙といった膨大な資料に基づいたものなのです。ぐいぐいと引き込まれて言葉どおり寝る間を惜しんで読みふけ、641ページという大作にも関わらず一気に読破したのをよく覚えています。

古本浪漫洲

開催中の情報

https://www.kosho.co.jp/furuhon_romansu/

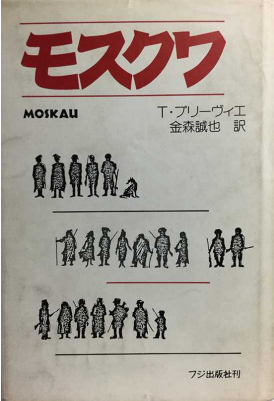
Twitter [@furuhon_romansu](https://twitter.com/furuhon_romansu)

会場直通電話 090-5996-3994 (会期中のみ)

主催◆金井書店



①



②



③



④

その一作品を読んで感銘を受け、プリーヴィエの代表作として第二次大戦における独ソ戦の激戦である『モスクワ』『スターリングラード』『ベルリン』の地名を冠した三作品があるというのを知りましたが、すぐに入手できるものとは思っていませんでした。それはまだインターネットが普及する以前、本を探すのが大変な手間のかかる行為であり、実際に神保町と早稲田の古本屋を訪ね、書棚の端から端を目を凝らして探求書がないか見て回ったこともあったからです。

それが偶然にも、調べ物で読んだ新刊の論創社の書籍(その本が『戦争と資本主義』ヴェルナー・ゾンバルト著 金森誠也訳 1996であったことさえ覚えています)の奥付広告で『ベルリン』が新刊本として発売されているのを知ったのです。『モスクワ』の「訳者あとがき」で共訳がすすめられていることは述べられていましたが、出版社の倒産で頓挫したと思っていたものが別の出版社から日の目をみたのです。急いで書店に注文しました。ネット販売が普及した今ではほとんど利用されない手段だと思いますが、その当時店頭に並んでいない新刊書籍を入手するほぼ唯一の手段は書店に取り寄せてもらうという方法でした。伝票に書名と氏名電話番号を記入し、1〜2週間後に店から電話がかかって来るのを待つという悠長なものです。無事に入手してこちらもまた772ページという大著にもかかわらず一気に読みふけ、同様に彼の世界観にのめりこんでしまったのです。作品のタッチとして前作と同じく詳細なエピソードの積み上げで、発表時期から彼の中でのソ連やドイツに対する見解が違っているのも興味深かったのです。

しばらくして1999年頃、そろそろネット古書のネット販売が開始されていて、私自身のパソコンや通信環境はまだ整っていませんでしたが知人に頼んで検索しても、残る『スターリングラード』を見つけた事ができませんでした。私と同じようなネット環境の古書愛好家は多くいたようで、2003年に福岡の古書店の店頭で「お探しの本をインターネットで探す代行をします」という看板を見た事すらあります。ただパソコンに向かって検索するだけだと思うのですが、当時はそれで商売になったのです。

2000年頃に、古書目録で偶然『カイゼルは去ったが將軍たちは残った』が出品されているのを見つけました。先着順ではなく締め切り日前に注文した客のうちのらの注文方式でした。こういう時には、少しでも確率を上げるために知り合いに

も注文してもらおうということを行うことがあります。無事に入手できましたが、本に付いてきた注文票によれば発注者は5人、いずれも私の知り合いでしたが、たまたま当選したのは私でした。

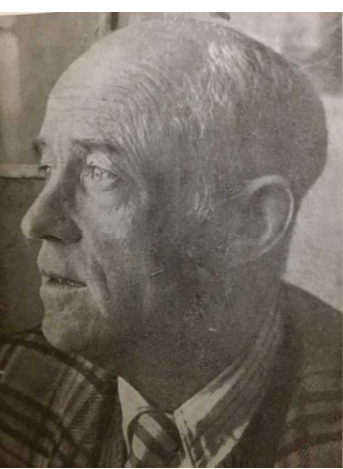
『スターリングラード』(改造社)をデパートの古書市で見つけたのもその頃でした。上下巻の書籍で値札には2冊でいくらと記載されているのに、どんなに探しても1冊しか見つかりませんでした。ですがそれだけでも入手しておかなければ、経験上古書との出会いに「次」はなかなか訪れてはくれません。レジで「1冊でこの値段で良いので買います」と伝えると、女性店員が困った顔をしていたのをよく覚えています。これは抄訳で、しかも前半部分のみとあってますます消化不良になった感がありました。

『スターリングラード攻防戦』が入手した最後の作品となりましたが、こちらはインターネットの古書販売サイト「日本の古本屋」または「スーパー源氏」で入手しました。「スターリングラード」は固有名詞(地名)ですので同様の関連書籍は膨大にあるのですが、それを一つ一つ見ていっての発見でした。というのも入手してみて分かったのですが、この作品に限って作者表記が「テオドール・プリーフィア」となっていて、検索では引っかからなかったのです。文庫本の体裁であったため、単行本よりも古書の流通の中では買いつらいというもありました。発表順としては最も初期の作品だけに生々しく、包囲されたドイツ軍將兵が寒さと飢えの中でどのように壊滅していったかがつぶさに描写されていて、その後も繰り返し何度も読んだ作品となりました。『最終戦-1945年ドイツ-』(ヴォルフガング・パウル著 松谷健二訳 フジ出版社 1979)によれば、ドイツ降伏後の1945年8月6日、ある中尉がベルリン放送で広島に原爆が投下されたというニュースを聞いたその日にも、プリーヴィエ自身によってこの作品が朗読放送されていたそうです。

後日談ですが、『スターリングラード攻防戦』を偶然、昨年11月に閉店した三省堂書店第2アネックスビル5階にあった神保町古書モールの二の橋書店の棚で発見しました。持っていたものよりもはるかに程度の良い本で、迷わずに即購入しました。図書館では同一タイトルの書籍を所蔵することはまずないのですが、このように必死に探した作品がもう1冊出てくると保存用として買い求めてしまうのです。実際、大事に大事にしていた最初の本を、旅行の時にも持って出るようになったのは2冊目があってからこそです。

私の30年近い、日本ではほぼ無名作家の著作を巡る蒐集の旅はとりあえず終止符を打っていますが、この稿を書くにあたり改めて古書販売サイトで検索してみたところ、出版年代の新しい『モスクワ』『ベルリン』の2作品は入手可能ですが、他の作品は難しいようです。ネットを利用すれば便利な時代ですが、プリーヴィエとの出会いが偶然の店頭であったように自分では知らない人類の英知はたくさんあるはずです。本を愛する皆さんであれば古書市や目録を通じて同じような経験をされたことがあるのではないのでしょうか。

Twitter鳴神堂　@utinotaicho



Part 1　4月4日(木)～4月6日(土) 古本うさぎ書林・坪井書店・藤井書店・林書店

Part 2　4月7日(日)～4月9日(火) 古本うさぎ書林・林書店・中央書房・金井書店

Part 3　4月10日(水)～4月12日(金) 新日本書籍・がらんど・弘南堂書店・由縁堂書店

Part 4　4月13日(土)～4月15日(月) 新日本書籍・文省堂書店・弘南堂書店・金井書店

Part 5　4月16日(火)～4月18日(木) 全品1冊につき 3 0 0 円均一(税込み)

新宿サブナード 東京都新宿区歌舞伎町1-2-2 TEL03-3354-6111 <http://www.subnade.co.jp>